

異文化間教育の導入的エクササイズとしての 認知地図に関する研究ノート*

田中 共子**・中野 祥子***

1. はじめに

心理学を背景とした異文化間教育の教材開発が進む中で、AUC-GS学習モデル(表1)は、複数のエクササイズを組み合わせていく異文化間教育の枠組みとして考案された(田中・中島, 2006)。そこでは異文化への気づき(A)、理解(U)、対処(C)に有用と考えられるエクササイズが行われていくが、エクササイズの内容自体は交換可能とされており、運用の自由度は高い。そこでどのようなエクササイズを選べば効果的なのか、エクササイズごとにどのような効果が生じるのかといった、具体的なプログラムの組み立て方の指針に関する研究が待たれる。適用例は少なく、在日留学生での教育適用は報告されたものの、日本人集団に適用した例はみられない。

本研究では、最初の導入的エクササイズを選択肢として「認知地図」に注目した。これは心理学で用いられる投影法の一つで、心理検査や心理学的な認知の研究などに使われてきた。指示された範囲について、思い浮かんだ通りに自由に地図を描くという作業が行われる。しかし自分の認識を投影する課題であることから、

適切な解説を伴えば、気づきを促す目的で教育的な利用ができると考えた。世界の地図を描くことを課題に使えば、自らの世界認識を見直すことができるだろう。今回の適用対象は日本人の大学生とし、このエクササイズが、異文化への気づきを得るという狙いを果たす教育的試みの選択肢になりうるかどうかを、検討していく。

		レベル	
		文化一般 Culture General	文化特定 Culture Specific
段階	気づき Awareness	AG 異文化の存在への気づき	AS 自文化を含む特定文化の存在や影響への気づき
	理解 Understanding	UG 異文化接触一般現象の知識と理解	US 特定文化における適応・不適応現象や特定文化自体の理解
	対処 Coping	CG 異文化接触一般に求められる対応の仕方の原則	CS 特定文化の文化的特徴に関わる対応の仕方

表1 AUC-GS学習モデル

* 本研究の一部は科学研究費補助金(15H03456)の助成を受けた。本研究は異文化間教育学会第35回大会にて発表された。

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

*** 岡山大学大学院社会文化科学研究科大学院生

2. 方法

2. 1. 研究協力者

総合大学であるX大学の学部学生47名。性別内わけは、男性8名と女性39名。平均年齢は20.1歳（SD=0.86）。実施にあたって、研究協力を依頼し了承を得た。海外滞在経験は、なし29名、一ヶ月未満13名、一ヶ月以上一年未満4名、一年以上1名。分析の対象とした上記の者は、受講生50名のうち回答に不備がなく、出身地を日本と答えた者である。

2. 2. 認知地図の課題

「何も参照しないで、世界地図を描いてください。他の人のものを見たり、話し合ったりしないでください」と教示し、四角い枠のみが記されたA4の紙（図1）に自由に描いてもらった。

2. 3. 手続き

20XX年度の大学の講義において、認知地図の課題を実施した。5人程度を1グループにして、書き終わった地図を互いに見ながら、似ているところと異なるところを抽出し、グループと個人にみられる特徴を話し合ってもらった。参考のため、黒板にメルカトル図法による世界地図の例を示した。その際、示す地図は一例に過ぎず、実際は多様な図法があること、正解を求める課題ではなく、思い浮かんだものをありのままに描いてみる課題であること、自分の地図の間違い探しをする必要はなく、特徴を考える参考にして欲しいことを伝えた。

認知地図の名称と仕組みを伝え、描いたものは自分の認識の投影として読めるという見方を伝えた。書きの込みの有無、正しさ、精密さ、線の太さ、形の大きさ、中心からの遠さ、描かれた順などを手がかりに、描き手の意識の濃いところと薄いところを考えながら、それぞれの世界観を振り返ってもらった。グループ内で意見交換を行い、その結果をグループ単位で発表し、その後に全体で意見を整理し、まとめを行った。

具体的な教示は、以下の通り。「メンバーの地図の“似ているところ”と“異なるところ”をみつけてください」「メンバーの地図に共通していることは何ですか。自分の地図の特徴は何ですか」「書きの込みの有無、正しさ、精密さ、線の太さ、形の大きさ、中心からの遠さ、描かれた順に注目してください」「特徴を整理するのに、世界地図の例を参考にして結構ですが、正確さを競う課題ではありません。特徴を見つけてください」「投影法による地図です。地図はあなたの認識を反映しています。それぞれの世界観を振り返ってみてください」

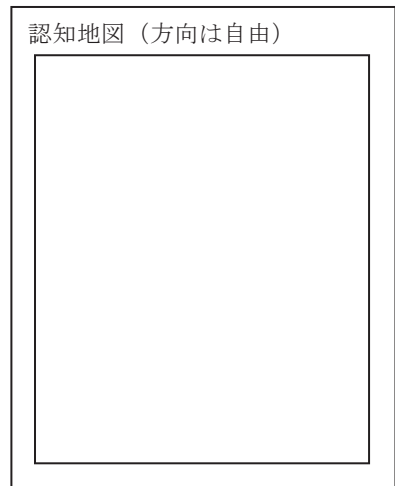


図1 認知地図の記入用紙

作業手順を、図2に示す。意見を出しやすくするため、A4サイズで作られたワークシートを使った。個人用ワークシート(図3)とグループ用ワークシート(図4)について、模式的に示す。最初に個人用ワークシートに自分の意見を書き込んでから、小グループで討論を行った。すなわちグループ討論の準備として、自他の地図の共通点と独特の点を箇条書きにして、続いて地図をみてわかったことを記してから、意見交換に移ってもらった。

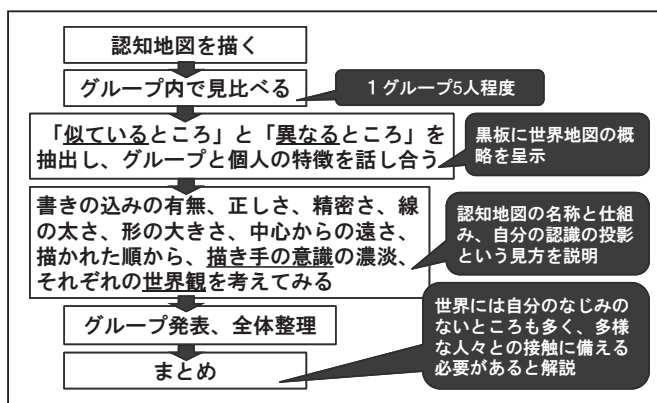


図2 作業の流れ

The individual worksheet contains the following questions:

1. 認知地図の類似点
2. 認知地図の相違点
3. 何か分かりましたか

図3 個人用ワークシート

The group worksheet contains the following questions:

1. 認知地図の特徴(類似点、相違点)
2. 上記の特徴は、何を反映していると思うか

図4 グループ用ワークシート

グループ編成にあたっては、5~6人程度を1組にすれば9グループが作れたので、1から9の番号を順に学生に言ってもらうことを繰り返し、同じ番号の者に集まって座ってもらった。その際は番号ごとにおよその座る位置を指示したうえで、移動してもらった。グループ内では、番号を言った順をもとに、司会と書記を割り当てた。その後、各自の意見を紹介しあい、司会の采配で意見を交換

してもらった。書記はグループ用のワークシートに、意見をメモする役を担った。グループ討論では、各自の地図に見られた特徴を、共通点と相違点に分けて整理してから、これらの特徴が何を意味しているのかを考えてもらった。最後に、グループ内の意見を他のグループに紹介してくださいと指示して、グループごとに発表してもらった。ファシリテーターが内容を確認しながら板書していき、最後に全体の内容を要約した。解説として、地図の大きさ、詳しさ、描き方の強さ、順序などには、存在感や関心や親しみなど心理的な距離感が反映されており、日頃意識するところは詳しく描かれるが、そうでないところは曖昧になりがちであること、離れたり消えたりする場合もあること、再現しやすいのは特徴的なところや馴染みのあるところであることを伝えた。まとめの振り返りとして、世界には自分のなじみのないところも多く、日頃は意識していなくても、この時代にあっては多様な人々との接触に備える必要があるということ、認識するよう促した。授業の最後には、今回の講義で学んだと思うことを自由に記述してもらった。

2. 4. 測定

地図については、その造形をみて、五大陸が全て描かれているかどうかなど、描写の特徴を集計した。学習者による自由記述には、①グループ討論の準備として自他の地図の共通点と独特の点を箇条書き、②グループ討論で皆に共通の特徴と個人の特徴を整理、③地図をみてわかったことのまとめ、および、④今回の講義で学んだと思うこと、の4点がある。これらは内容分析によって整理した。

授業の前後で、文化的気づきに関する評定項目（5段階）に答えてもらい、対応のある t 検定によって変化について分析した。教示文は、「あなたは、次の(1)～(4)のように思いますか？ ①まったくそう思う、②少しそう思う、③どちらともいえない、④あまりそう思わない、⑤まったくそう思わない」とした。たずねた項目は、以下の通り。「(1)世界の中には、自分の意識していなかったものも含めて、たくさんの文化がある。(2)自分の慣れ親しんだ文化が、世界で唯一の文化だったわけではない。(3)自分がこれから出会う人は、自分とは異なる文化を持っている人かもしれない。(4)様々な異文化が存在することを意識している」最後に、上記の評定に天井効果が生じる場合を想定して、「上記の(1)から(4)のうち、この授業前と比べて、後の方がいっそう強く“そう思う”ものがあれば、○をつけてください。（複数選択可）」と尋ねた。

3. 結果

3. 1. 描かれた地図の概略

描かれた地図の例を、図5に示す。Aさんの地図では、中東とアフリカ大陸とヨーロッパ西端は描かれず、南北アメリカが分離している。日本は比較的大きく詳しい。Bさんは、五大陸が分離しており、南極と北極とグリーンランドが大陸状に描かれている。Cさんは、アフリカが小型化し、

日本は南下している。南北アメリカは分離している。Dさんは、中心に大きめの日本があり、四つの分離した大陸がそれを囲んでおり、南米はみられない。欧州が付け足されている。Eさんは、南北アメリカが一体化し、アフリカ大陸は離れ、オーストラリア大陸は丸みを帯びている。スカンジナビア半島あたりが島になっている。東南アジアは簡略化されている。北極と南極が大陸状に描かれている。Fさんは、南北アメリカ、およびユーラシア大陸とアフリカ大陸の縦の関係が強調されている。オーストラリアとイギリスと日本が描かれているが、日本は三つの島から成っている。Gさんは、さらに大陸の上下のつながりが強調され、大陸連結部分のくびれは存在せず、二大陸ずつ単純化されてまとまっている。日本は四つの島として描かれ、南極大陸は広々としている。Hさんは、ユーラシア大陸と北米大陸がつながっている。真ん中がくびれた形で南アメリカは繋がって描かれているが、アフリカのあたりは線が消えている。オーストラリアは丸くなって、インドかもしれない突起の南にあり、ニュージーランドらしき島がその西に位置している。Iさんは、日本を中心に、周囲が簡略化されており、オーストラリア以外の大陸は端まで描かれず、アフリカはみられない。南アメリカは北アメリカの一部がふくらんだように描かれている。

参加者全員の地図を全てみながら、地図にみられた特徴を整理してみた。以下に、括弧内に人数の割合(%)を示す。日本が中心に描かれている(97.9%)、五大大陸がある(93.6%)、アフリカと欧州が離れている(53.2%)、東南アジアが描かれていない(51.1%)、南北アメリカが離れている(40.4%)、アラビア半島が描かれていない(31.9%)、五大大陸が不完全(23.4%)、ユーラシア大陸と北米がつながっている(23.4%)、南北アメリカが一体化(19.1%)、五大大陸以外は描かれていない(17.0%)、アフリカと欧州が一体化(10.6%)。

3. 2. 地図から読み取ったこと

地図から読みとったことに関する、学習者一人あたりのコメント平均数(SD)は、共通点4.62個(1.73)、独特の点3.38個(1.38)、分かったこと3.26個(0.98)に分けられる。次に内容とコメント数を挙げていく。

共通点として挙げられたのは、以下のことであった(括弧内はコメント数)。日本が中心などの「位置」(59)、五大大陸がある、南極がないなどの「大陸の有無」(33)、ニュージーランドがない、島は省略される、インドがあるなど「国・地域・島の有無」(45)、日本から離れると曖昧、アジアのあたりが適当、関心のある部分は細かい、日本は細かいなど「詳しさ・曖昧さ」(48)、日本が大きい、直線で表すなど「形・大きさ」(15)、アメリカ大陸分断、大陸のつながりなど「つながり・ちぎれ」(6)、日本から描くなど「描き方」(18)。

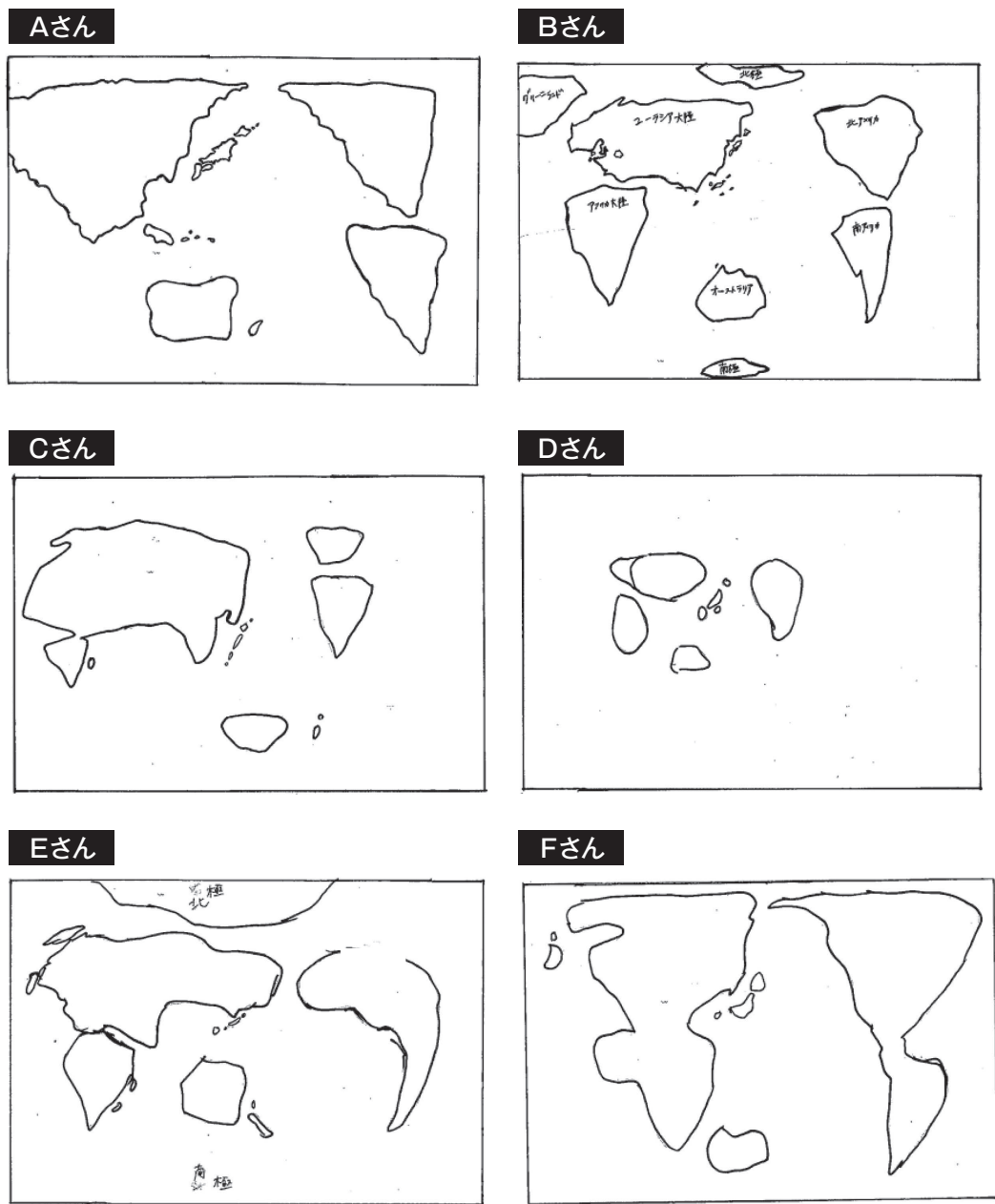


図5 認知地図

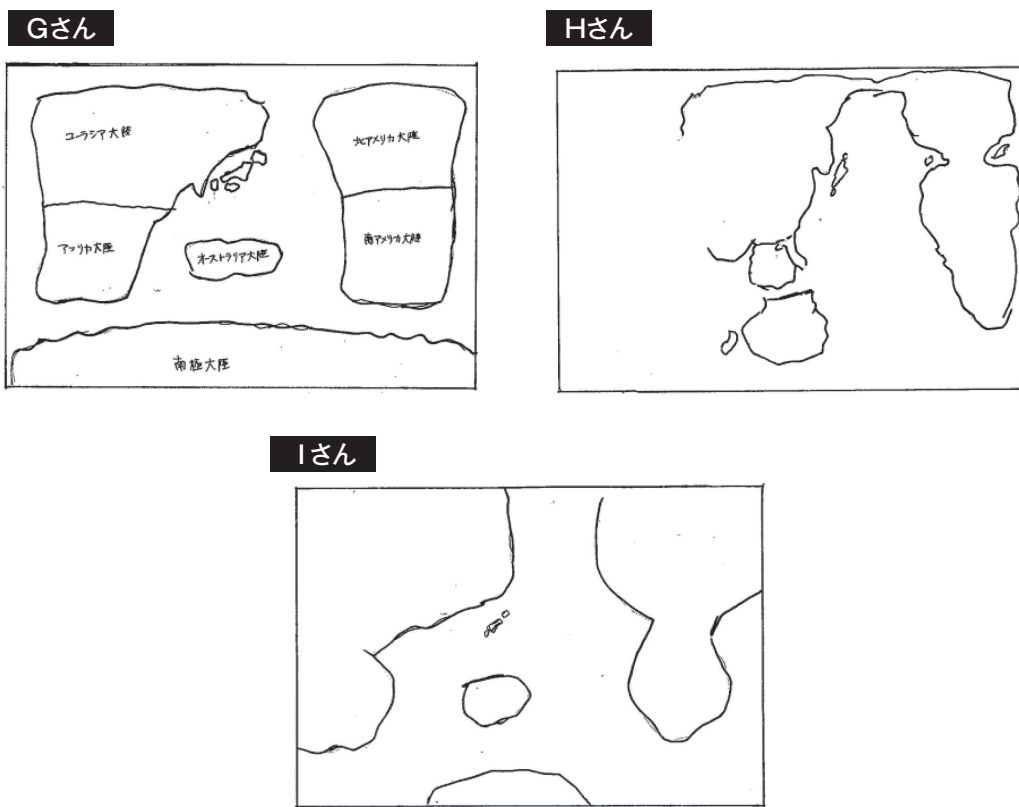


図5 (つづき) 認知地図

独特な点に関する記述にも、上記カテゴリが確認できた。位置 (5)、大陸の有無(22)、国・地域・島の有無(48)、曖昧さ・詳しさ(26)、形・大きさ(18)、つながり・ちぎれ(28)、描き方(6)であった。

地図を描いてみて分かったこととしては、以下が挙げられていた。自分の関心の度合いが地図に現れること(57)、自分の地図の特徴(13)、個人差(8)、他国・異文化・世界への関心の低さ(30)、認識の低い地域の存在(2)、世界認識の曖昧さ(11)、認識と現実のずれ(4)、未知の文化の存在(8)、日本人の反応の類似性(10)、日本中心の認識(8)、今後の態度(3)。

学びの具体例を、Aさんの場合について以下に示す。Aさんが共通点として指摘したことを要約すると、「日本が中心の地図、ユーラシア大陸は比較的細かい、アメリカ大陸のあたりは三角形で描いている、アメリカ大陸の分断」となる。独特な点としては、「大陸全てが入っていない、オーストラリアが大きい、スマトラ島のあたりがさまよっている」ということを挙げている。分かったこととしては、「関わりが深い、良く意識する地域は描ける。それ以外の地域は大まかなイメージでしか描けない。自分が思っているよりも、外国や異文化に対する関心、興味、意識があまり大きくないころが読み取れた」という内容を記している。

3. 3. 授業を通じて学んだと思うこと

授業を通じて学んだと思うことについては、一人平均4.92個 ($SD=0.92$) の記述が得られた。以下に記述と、括弧内にコメント数、および記述の例を示す。①他国・異文化・世界への認識の低さへの気づき (33) 一例) 自分が世界の異文化にどれだけ意識していないか分かった。②未知の文化の存在への気づき (15) 一例) 意識できている文化や国は少なく、多くの知らない文化が存在している。③未知の文化との出会いの可能性への気づき (2) 一例) いつどこで異なる文化を持った人と会うか分からない。④日本中心の認識への気づき (5) 一例) 日本や自文化を中心として生活している。⑤自分の認識の低い地域が存在していたことへの気づき (3) 一例) 異文化の人々との間には大きな習慣や考え方の違いがある。⑥日本人・日本文化内の反応の類似性 (8) 一例) 同じ文化に育ったメンバーだと細かいところや荒いところが共通している。⑦個人差の表出への気づき (27) 一例) 認知の仕方が人それぞれ違う。⑧異文化交流への態度・心がけ (5) 一例) 様々な地域にもっと関心や意識を向けなければならない。⑨異文化に関する学びへの動機付け・理解・興味 (15) 一例) お互いの文化を尊重しあう気持ちが大事。⑩認知地図という学び方への関心 (6) 一例) 投影法による心理的距離などを見る効果を実感。

3. 4. 文化的気づきの意識の変化

文化的気づきについて、評定を依頼した4項目の認識は、授業の前より後で全て有意に高まっていた。①世界の中には、自分の意識していなかったものも含めて、たくさんの文化がある ($t(46)=-4.19, p<.01$)。②自分の慣れ親しんだ文化が、世界で唯一の文化だったわけではない ($t(18)=-3.09, p<.01$)。③自分がこれから出会う人は、自分とは異なる文化を持っている人かもしれない ($t(46)=-5.39, p<.01$)。④様々な異文化が存在することを意識した ($t(46)=-5.63, p<.01$)。

授業の前より後で、より強く思ったこととして○を付けた項目は、平均1.47個/人 ($SD=1.19$) であった。○をつけた人数 (%) を項目ごとに示すと、以下の通り。①世界の中には、自分の意識していなかったものも含めて、たくさんの文化がある : 16 (34.8)。②自分の慣れ親しんだ文化が、世界で唯一の文化だったわけではない : 12 (26.1)。③自分がこれから出会う人は、自分とは異なる文化を持っている人かもしれない : 20 (43.5)。④様々な異文化が存在することを意識した : 21 (45.7)。

学びの例を、先に地図を示した学習者の中から、DさんとGさんの場合について示す。Dさんの前から後への評定の変化をみると、「(1)世界の中には、自分の意識していなかったものも含めて、たくさんの文化がある」において、評定2(少しそう思う)から1(まったくそう思う)と強まる方向に変わっており、より強く意識した項目としてもこの項目を選択していた。この授業から何が学べましたか、という問いには、以下のように答えている。「それなりにニュース等で世界の情勢や文化を知ったつもりでいても、それは本当にごく一部の少数の地域についてだけであるとい

うことを強く認識した。場所や国名さえわからない国が多数あり、世界をとっても曖昧にしか認識できていないということは、それ以上に文化についてはもっと無知であるということを表しているのではないかと思った。様々な地域にもっと関心や意識を向けなくてはならない、と思った」Gさんは、前も後も評定は全て1のままだったが、より強く意識した項目としては、「(1)世界の中には、自分の意識していなかったものも含めて、たくさんの文化がある」を選択した。そしてこの授業から何が学べましたか、という問いには、以下のように答えている。「頭では様々な文化があるということを知っているつもりでも、実は全く意識できていないのではないかと思った。自分と他国間の心理的距離によって省略や分断が生じるということが分かったので、自分がいかに世界を知らないか、無関心であったかということに気づくことができた。(中略)距離を縮めるには、能動的な態度が不可欠なのだと思う」

4. 考察

学習者は認知地図が多様なゆがみを含むことを知り、それを認識の反映としてみることで、自らのものの見方を振り返る機会を得た。彼らはこのエクササイズを通して、世界における自分の認識範囲が限定的であったことを認識し、自分の慣れ親しんだ地域以外に多くの未知の文化圏があることに気づき、他文化への関心や異文化交流への学びの動機付けを高めた。異文化対応能力を涵養する目的で展開される、日本人学生対象の異文化間教育において、異文化への気づきを高める導入的なエクササイズとして一定の効果を持つものと考えられる。

本稿の分析対象は、田中(2015)が分析対象とした集団と一部重なる。そこでは、AUC-GS学習モデルの複数のセルに該当する学習パーツを実施した際の、教育効果をまとめて検討しているが、本研究はそのうち初回の試みについて独立させて報告したものである。ただし今回は、初回の参加者全てを対象としたため、全15回に参加したものを対象とした上記の報告より分析対象者が多く、またこのエクササイズに関する結果のみを事例と共に紹介したことで、より詳細な報告となった。

AUC-GS学習モデルに基づく心理教育的な異文化間教育では、初回に「文化への気づき」を取り上げる。今回のエクササイズは認知地図を使って自らの世界認識を振り返ることで、その気づきを導こうとしている。AGセルに使えるエクササイズを他にも考案し、教育パーツの選択肢を増やすことが今後の課題である。

〈引用文献〉

- 田中共子(2015) AUC-GS学習モデルに基づく日本人学生を対象とした心理教育的な異文化間教育の試み 異文化間教育, 41, 127-143
- 田中共子・中島美奈子(2006) ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み 異文化間教育, 24, 28-37